

第2回東アジア放送作家カンファレンスにて

日本放送作家協会 市川森一理事長の基調講演 (2007年6月11日)

「日本のドラマ作家事情」

市川森一

昨年の韓国・釜山での第1回目の会議に続き、今回「第2回東アジアドラマ作家会議」を、この上海の都で開催することが出来ました慶びを、参加国のすべての皆様と共に分かち合いたいと思います。

また、今日のこの日のために、さまざまな努力を積み重ねてくださいました、開催国のSMG（上海メディアグループ）ドラマセンターの皆様方と、韓国の国際文化産業交流財団のシン・ヒョンテク理事長に、心からの御礼を申し上げます。

私は、ここに、主催者側のご要請に従い、短い時間ではございますが、日本のテレビドラマの現況と、ドラマが置かれているテレビメディア全体の現状をかいつまんでお話させていただきます。

現在、日本のテレビでは、1年間に何本のドラマが制作されているでしょうか？また、制作予算はどのくらいでしょうか？そのあたりからご説明をさせていただきます。

日本のテレビ放送業界では、現在、1年間に平均160シリーズの連続ドラマ、これは、週1回の放送から毎日放送の連続ドラマ、期間も1年間から、1ヶ月単位の連続ドラマ、すべて合わせた数ですが、160タイトル。それに、480本ほどの単発ドラマ。一話完結ドラマですね。大半は、2時間ドラマです。ついでに言うと、2時間ドラマのほとんどが、サスペンス、ミステリー、事件ドラマで占められます。つまり、視聴者はほぼ毎日のようにどこかのテレビ局の殺人ドラマを観せられるという状況を生じさせることになり、子供の教育にも問題があるのではないかという声が起こって、現在では、少し、自粛の傾向にありますが、しかし、依然としてテレビは、ニュースとドラマで連日、殺人事件を見せている状況に変わりはありません。

次に、制作費ですが、日本円ですが、2時間ドラマで5千万円が平均とされています。

しかし、この5千万円のラインも、近年は削減される一方です。

制作費カットの最大の理由は、わが国のドラマの制作システムがあげられると思います。

わが国のドラマ制作は、テレビ局が自ら制作する、いわゆる、自主制作と、外部の制作会社に作らせる、下請け制作の2つのシステムに分けられます。私の知る限り、欧米では、ニュース、報道番組以外は、テレビ局が自らの局内にプロデューサーや演出家を局員として勤務させ、ドラマ制作に当たらせるというシステムが存在しませんので、自主制作という言葉も、下請け制作という言葉もはじめからないわけで、この自主と外注の両立構造は極めて日本独自のシステムといえるかもしれません。そこにはつまり、本来はテレビ局が自主で作らなければならないものを、経費削減などの目的のために、外部の制作会社に下

請けさせて作らせる、という構造を生み出しています。

外注を受ける会社は、大抵、複数の中から、丁度、建設会社が入札で仕事を請け負うのと似たような形でドラマ制作を受注します。制作費のコストダウンは、この制作会社同士の受注競争によって生じます。

さらに、受注した制作会社は、その仕事を別の下請け会社に、さらに安いコストで卸すということが当たり前のように行われています。これを孫請けとっています。実際に使われるべき制作費がどんどん減らされていく構造です。

みなさま方のお国ではどうなっているのでしょうか？自由討論のときにでも教えていただければと思います。

さて、そうしたドラマ作りの中で、私たち脚本家の脚本料は、どれほど支払われているのでしょうか。これは、この会議でも一番大事なところですね。もちろん、作家にはそれぞれのランクがあります。

一番安いランクで、2時間ドラマ1本、70万円。最高額が4百万円といわれています。普通で、2百万円ぐらいが相場のようなようです。

韓国、中国のみなさま方の脚本料と比べていかがですか？

日本側の理想をいえば、制作者は脚本料に制作費の1割を当てるべきだと考えます。制作費が5千万円ならば、1割の5百万円が平均の脚本料になるよう制作サイドに働きかけていかなければならないと思っています。

それには、ドラマにおけるシナリオの重要性を、もっともっと制作サイドに認識させなければなりません。

脚本家ひとりひとりの社会的地位をさらに向上させなければなりません。かつては、テレビの脚本家は、小説家、劇作家に比べて低く見られる傾向がありました。しかし最近では、有能な作家たちが、自分の作家性を発揮する場を、テレビだけでなく、映画、小説、演劇の世界に求めるようになり、テーマや素材に応じて書き分けるようになりました。おかげでジャンルの壁がなくなりつつあります。これは、脚本家の地位向上のためにはとてもいい傾向だと思っています。

脚本家の地位を向上させるための、最も基本的なこと。それは、言うまでもなく、脚本家がいいシナリオを書くことです。いいシナリオって？読む人によって違うんじゃないの？もちろん、いいシナリオの基準はひとつではありません。社会に影響を与える高視聴率のヒット作品、これもいいシナリオです。最近では、いまここに同席している、中園ミホさんの「ハケンの品格」という連続ドラマが、大人気を博し、社会的にも大きな反響を呼びました。文句なしのいいシナリオです。

もうひとつのいいシナリオ。それは、文学的にも質の高い、芸術祭賞とか、文部科学大臣賞とかの受賞の対象になるような作品です。

日本では、この両者が、バランス良く両立しているようです。

ちなみに、現在、日本ではどんなドラマが高視聴率を取っているか、5月29日のビデ

オリサーチによるベスト30に入っている7本の作品をご紹介します。

まず上位から、NHKの朝の連続テレビ小説「どんど晴れ」。これは毎朝の放送です。次が、NHK大河ドラマ「風林火山」。戦国時代の英雄、武田信玄を主人公にした歴史ドラマです。次が、民放の単発ドラマで、「山田太一ドラマ・スペシャル・星ひとつの夜」。山田太一氏は、常に良質なドラマを書くことで定評のある日本を代表する脚本家です。あともすべて民放局の作品ですが、「西村京太郎スペシャル・みちのく殺意の旅」そして「警視庁捜査一課9係」次が「占い師みすず2・事件は運命の彼方に」（日本語としても理解が難しいこのタイトル、中国語や韓国語でどんなふうに訳されたのか、心配です）。この3本、いずれもサスペンス物といわれる2時間ドラマです。そして、30位に辛うじて入っているのが、「水戸黄門」という日本人にはお馴染みの長寿番組、ヒーロー時代劇です。

一方、こうした高視聴率とは関係ないところで、優れた脚本家が脚光を浴びる場もあります。「テレビガイド」という日本で最大のテレビ情報誌が主催する「向田邦子賞」がそれです。27年前、航空機事故で亡くなった有名脚本家、向田邦子さんの名前を冠して設立された賞で、これは、視聴率とも世間の話題とも関係なく、あくまでも脚本家の作家性を重視して選ばれるもので、今年で25回目を迎え、多くのプロの脚本家の憧れの賞となっています。これなど、視聴率至上主義のテレビ局に対し、あくまでも脚本家の個性を尊重する、視聴率とは別の価値基準を確立して、テレビドラマの質の向上に貢献している賞だと言えます。

テレビ作家の地位が小説家より低くみられがちだった理由のひとつに、テレビドラマが、放送が終われば消えてしまう消耗品の扱いを受けた時期が初期にあったことが上げられます。

テレビドラマは、いまや消耗品ではありません。再放送やDVDの普及と共に、作品さえよければ永久に生き続けることができるようになりました。すでに映像物に関しては、数年前から、各局ごとに自局のビデオを保存、管理する「アーカイブズ」システムが確立して、機能していますが、私たちに必要な「脚本のアーカイブズ」は放置されたままでした。

日本の場合、テレビが開局して50年が過ぎました。この間、一体、どれほどの数のテレビドラマが放送され、消えていったでしょう？消えてしまった映像は取り返しがつきませんが、シナリオ台本なら、いまからでも集めることができます。

現代文明の先端を走るテレビ文化の担い手として、私たちは、映像と同様に、ドラマ台本も、テレビ文化の貴重な資産として、後世に残す義務があるのではないのでしょうか。

実は、3年前、私は以上のようなことを国会の総務委員会で訴え、早期の「脚本アーカイブズ」の設置を要望しました。その反響は大きく、文化庁、NHK、日本民間放送連盟などが支援にに応じていただき、現在、わが日本放送作家協会を中心に、「日本脚本アーカイブズ」準備室を立ち上げて、過去50年間散佚したままのテレビ台本の収集と管理保管を行っているところです。

「残す」という概念のないところには、文化も成立しません。私たちは、テレビ文化をより価値あるものとするために、未来の脚本家を目指す人々のために、私たち脚本家の地位の向上のために、これからも「脚本アーカイブズ」の運動を続けて参ります。

中国、韓国では、こうした脚本のライブラリー、あるいは、アーカイブズはどうなっていますか？本日得た情報ですが、韓国ではすでに国家が大規模な予算を組んで「脚本アーカイブズ」の実現に乗り出していると伺いました。この話もあとで詳しく聞かせてください。この機会に、是非、「脚本アーカイブズ運動」を東アジア全体の脚本家の運動として広げていくことを、この場で提唱したいと思います。

テレビドラマが、いまよりもっと豊かな環境で制作されるようになるための条件は何か？

そのひとつが、マーケットの拡大です。

アメリカの脚本家が、私たちと比べてケタ違いの高額な脚本料を手にできるのは、その作品が世界をマーケットにしているからです。

これからは、私たちも、世界に通用するドラマの発想とシナリオを書いていかなければなりません。

その手始めとして、先ずは、同じ「箸」の文化を共有する東アジアのマーケットから、お互いに開拓していこうではありませんか。

この「東アジアドラマ作家会議」の真の目的は、ドラマ・コンテンツの実践にあると、私は受け止めています。

私たちの自覚次第では、テレビドラマは有益な輸出産業になり得ます。

しかし、そのためには、互いが何を求めているかを正確に理解する必要があるでしょう。私たちドラマ作家が、こうして交流し、意見を交わし、互いのドラマの作劇法まで知りたいと思うのは、自分のドラマを、他国のあなた方に受け容れてもらいたいためです。同時に、あなた方のドラマを受け容れたいためです。

私たちドラマ作家が、互いに関心を持ち合えば、きっと、東アジア全地域に歓迎されるドラマを作り得る筈です。

私たち作家は、こうした会合を、ただの親睦会にとどめず、即、仕事に役立てる力を持っています。

私の場合は、去年、韓国の釜山での「ドラマ作家会議」で得た取材をいかして、日本と釜山を舞台にした、在日3世の女性を主人公にした映画のシナリオを書きました。「花影」というタイトルの映画ですが、すでに釜山の撮影もクランク・アップし、現在、仕上げの段階に入っています。公開は、日本と韓国で同時に行う予定で進んでいます。これも、去年、釜山湾でクルージング・パーティをしたときに思いついたストーリーが軸になっています。そういうわけで、私の映画のファーストシーンも釜山湾のクルージング・パーティです。

この上海でも、早速、日本の長崎と上海を結ぶテレビドラマを思いつきました。こちらも、すでに、先月、上海のシナリオハンティングを終え、上海メディアグループの皆様方と共同制作の準備に入りました。タイトルは「月の光」といいます。このタイトルを決めたとき、上海の方に、「月の光は、中国語ではなんと書きますか？」と訊ねましたら、「月光」と書いたメモを渡され、笑われました。日本の漢字は、中国からいただいたということを忘れていたのです。この瞬間、同じカルチャを共有している連帯感を強く感じました。最近、韓国も漢字教育が見直されているようで、とても嬉しく思います。

この様に、すぐに実践に移すことが、大事です。そうすれば、この会議も、もっともっと有益で権威のある、東アジア全体にとって貴重な会に成長していくでしょう。

最後になりましたが、来年は、日本で開催します。目下の予定では、長崎県のハウステンボスというオランダそっくりの街にみなさまをお迎えして、楽しく有意義な催しにするつもりで、いまから準備に入っています。第3回目のテーマはなんにするか、この会議の間にも相談しましょう。

来年のためにも、この上海会議が実りある会になりますことを願って、私の報告を終わります。